医甲様式２

論文審査の要旨（甲）

申請者領域・分野　氏名	病態制御科学領域　細胞計量解析学教育研究分野 刀稱　亀代志
指導教授氏名	黒瀬　顕
論文審査担当者	主　査　萱場　広之 副　査　水上　浩哉　袴田　健一

（論文題目）Utility of intraoperative cytology of resection margins in biliary tract and pancreas tumors（胆道および膵臓腫瘍の切除断端における術中迅速細胞診断の有用性）

（論文審査の要旨）

胆道および膵臓の悪性腫瘍の手術療法において、悪性病変の切除断端への残存の有無の術中病理迅速診断による確認は極めて重要である。しかし、術中病理迅速診断には、標本の採取方法や処理方法が必ずしも理想的ではない場合があることや、判定までの時間に迅速性が要求されること、きわめて高い診断精度が要求されることなど、厳しい条件が課されている。いかにして早く正確な判定を行うかは、臨床病理診断分野におけるもっとも基本的な課題と言える。本論文では、いまだ十分なエビデンスの報告のない胆道および膵臓の悪性腫瘍の手術療法における切除断端の捺印細胞診による迅速細胞診断の有用性に検討を加えている。比較検討する方法として凍結組織診断による検討を、ゴールデンスタンダード（対照）としてパラフィン標本による最終組織診断を用いている。胆管断端 77 検体では迅速細胞診断と凍結組織診断の一致は 75 例、膵断端 30 検体における一致は 28 例と高い一致率を示している。最終組織診断とは、胆管断端では、感度 96.7％、特異度 100％、陽性的中率 100％、陰性的中率 97.9％、正診率 98.7％であった。膵断端では感度 100％、特異度 92.9％、陽性的中率 50％、陰性的中率 100％、正診率 93.3％であった。本研究によって迅速細胞診は凍結組織診断と同等の精度を有することが示され、また不一致例の検討から迅速細胞診は凍結組織診断を併用することによってさらに診断精度を上げられると予想された。本研究は研究手法や結果の解析、解釈に関しても適切に行われている。本研究の臨床医学の現場に即応用できるものであり、臨床的にも有意義であり、学位授与に値する。

公表雑誌等名	Diagnostic Cytopathology　2015;43:366-73.